

週日の説教

金 大烈 神父 2010年10月20日(水)

《巡礼の分かち合い》 - イタリア・メジュゴリエ・クロアチア -

ただいま帰りました。巡礼の旅が結構厳しかったので、自分でも気がつかない疲労感があったようでよく眠りました。

さあ、今日は私が巡礼に行って感じたことについて、皆様に分かち合いたいと思います。そこに行かれた40数名の方は、各自がそれぞれ感じられたことがあると思うのですが、私が個人的に感じた事を申し上げたいと思います。

本当に巡礼らしい巡礼になったと思います。厳しい日程で、一緒に行かれたメンバーも、皆さん二十歳^{はたち}ではなかったので(笑い)色々難しさがあったのは確かなことでした。そして、言葉が違う韓国の兄弟姉妹と共に動いたので、この面でも色々不便さを感じた旅でした。

私が最後の日に不思議と思ったのは、巡礼も終わりに近く、仕上げる心で過ぎた日を振り返ってみますと、不思議と回る順番が整えられた気がしました。私達の計画は乗船するフェリーのトラブルによって少しの変更がありました。初めローマについて一泊はアジジにて、翌朝、太田の教会でもなじみのある、アジジのフランシスコ聖人の足跡をたどって、聖女クララ聖堂を巡礼後、メジュゴリエに行きました。メジュゴリエではお母さんであるマリア様に会って具体的に体験したことは、言葉では言い表せないのですが、私の目では、殆どの方がそれぞれにご自分なりに体験が出来た旅だったと確信します。

とにかくメジュゴリエに行ってはっきり感じたのは、お母さんの愛でした。私達はこんなに愛されていると強く感じて、たまらない悔い改めの涙を流しました。そしてその後、ピオ神父様の所に行きました。ピオ神父様のことは皆様ご存知ですよ。50年間聖痕を頂いて生きている聖人だと言われ、1980年代に聖人になった方です。その方の生涯について、また彼が見せて来た色々なこと、遺跡を見ながらも感じ入るものがありました。その後訪れた所はベネディクト修道院。いわゆる修道会として一番初めに会として活動した所です。それからローマに入りました。巡礼者が行く4つの大聖堂を巡りカトリック信者の墓地、カタコンベに行って、翌朝、飛行機に乗り帰路に着きました。

何故不思議と思ったか申し上げますと、まず、マリア様がご自分の所に呼んで下さった感じがしました。そしてお母さんがどのくらい私達を愛しているか、私達に望んでいるものが何であるかを教えるために、メジュゴリエに来てほしいと呼び掛けたのではないかと思います。お母さんが何よりも望んでいるのは、ご自分の愛される息子イエス様に、人々が悔い改めて、戻って来ることだったんでしょう。その後私達がランチャーノ聖堂で体験したのは御聖体でした。イエス様、ミサ、そして今までちょっと軽んじてしまった所さえ色々強く反省する体験が出来ました。その次にはマリア様の意向、そしてイエス様の御旨に従う心を持って殉教された人々の所でした。使徒パウロの巡礼の道、そして

沢山の人々が迫害によって殺され、キリストの約束という希望をもって葬られたカタコンベ。全てのことを振り返って見たら順番が整えられて、「私達がこのような過程で、私達の信仰を深めなければならない」と、そのような思いでした。

多分、先ずメジュゴリエで本当にこのように愛しているお母さんに対して、そしてそのお母さんが私達に望んでいることはただひとつであること。いつも忘れてしまっている私達。言葉としては簡単に言えるかも知れませんが、ミサのために、御聖体のために、イエス様の痛みのために、50年間聖痕を持ってその痛みを耐えられた、ピオ神父様の人生を考えて見ますとこれは大変なことです。よく想像して見て下さい。イエス様が槍で刺されたそのわき腹の痛み、釘によって穴になっている4箇所痛み、それを50年間、毎日血を出しながら生きた司祭の、一人の人間の痛み、孤独感、そして人々に対してのもどかしさ、それを想像してみてください。誰が耐えられる痛みでしょうか。しかし、イエス様から頂いた御聖体に対する信仰、それによって全てを乗り越えられたそのピオ神父様のことをみたら、もう恥ずかしい気持ちでたまらなくなっていました。そういう意味でメジュゴリエとピオ神父様の所、そして御聖体と御血の奇跡があったランチャーノ聖堂で両国（私達と韓国の兄弟姉妹）の人々がひとつになって涙を流してミサを捧げた感動も体験しました。私は自分の涙が恥ずかしくて、ほかの人が泣いているかどうか顔を見て見る事も出来なかったのですが、皆泣いている様子を感じながらミサを捧げました。

イエス様の愛とか、マリア様の現存とかあらゆるものを体験しながらも、もうひとつのメッセージが個人的にありました。

愛という言葉、神様の愛、イエス様の愛、お母さんのそのもどかしい心、それを体験した反面、もうひとつの自分の心を痛める光景が見られました。それはメジュゴリエに行った時も同じです。全ての聖地でも同じでした。最後にローマに行った時にその痛みはクライマックスでした。

メジュゴリエは聖地と言われて沢山の国から人々が集まって来ている所です。初めての頃はもっと純粋な心で人々が熱心だったのでしょう。しかし、記念品やお土産品を売る所に行ってみたら、商売する者達は慣れてしまって、聖地にあるものとして、聖なるものを売る姿ではありませんでした。完璧な商売人で、親切さも全部失って物を投げるような態度で人と接する姿がありました。

メジュゴリエでは国際ミサに与ったのですが、香部屋に入ると、管理している修道会の何人かの司祭と、何人かのシスターがいました。この方達も慣れてしまったせいか硬い表情で、何でも事務的にこなしてしまう姿がありました。やっぱりそのとき感じたのは、「恵みがあふれる所には必ず悪のいたずらが生じる」という体験でした。そして、心痛みながらも他の司祭達と一緒にミサを捧げたのですが、その夜、御聖体顕示があると聞いて行って見ました。そこでは何よりもうらやましかったのは数千人も超える20代、30代の人々がいっぱいでした。跪いて祈っているその姿を見て「まだ教会は希望がある」、このような若者達が、結構寒かったのですが、それも気にせず何も無い所で、伏せて祈っている姿、涙を流して祈っている姿を見て、「恵みあふれる所に、悪も一緒に強く働くかも

知れないけれど、私達が勝つことが出来る」と希望が見えました。

そして御聖体、御血の奇跡が起こった所に行った時も同じです。私が10年前にヨーロッパを訪れた時と変わらないことがひとつありました。それは、聖堂でトイレを使う時、お金が必要なことです。もちろん、それを教会が管理することが出来ないから、ある会社に任せていると思います。それで人々からお金を取るようになってきているようですが、どんなに考えても、理解しようとしても醜い。教会でさえ、トイレに行く人から、お金を貰おうとする様子を見て育った子ども達は、このカトリックの信仰に対して何を思うかと考えてみたら、それもひとつの悲しさでした。

メジュゴリエでのもうひとつの印象、ボスニアという国の経済はメジュゴリエの村の巡礼客によってその7割を支えているのだそうです。そのボスニアという国の経済はメジュゴリエがなくてはなりません。その村人、熱心な人もいるでしょうが、その回りはタバコの吸殻が散乱していて、また、色々なゴミをどこにでも捨てる姿を見て、いたずらが強いなと思いました。

ローマに行った時も全く同じことだったのですが、ローマにはカトリック教会の主な聖堂として4つの大聖堂があります。ひとつは聖ペトロ大聖堂、もうひとつはラテラノと言われる聖ヨハネ大聖堂、それから聖母マリア大聖堂、そして聖パウロ大聖堂。13世紀に建て直された新しいものだそうですから、今から約700年前に建てられたものです。その当時どんな機械があったのでしょうか。それは全部手で、人間の手で、力で作られた建物です。皆様も、そこに行かれた方も多くいらっしゃると思いますが、その建物は普通のカメラのレンズには入らない大きさです。後方にさがって建物全体を入れようとしても、ひとつの建物がカメラに入らない大きさです。そのため、どれぐらいの人々が犠牲されたか、私は10年前に訪れた時にも心痛めたことのひとつでした。いい体験も沢山あったのですが、今回もそういうものも目に入りました。

何よりもローマと言えば、カトリックの教会の心臓ですよね。そこで一番目に留まったのは物乞いする人々でした。貧しい人々です。一番教会の源であるローマ・カトリック教会の核と言われるローマの真ん中で、そのような貧しい人々が集団で物乞いする姿を見て、色々複雑な思いが浮かびました。

カタコンベに行って、今までのことがまとめられました。まずひとつ得られたこととして、マリア様、イエス様、御父の御心を強く感じたと言いましたよね。また逆に、その反対の痛みも感じたと言いましたよね。まとめられたのは、これが教会の現実だということです。

ローマに行ってその物乞いする貧しい人々を教会がもてなすべきその態度。私はそれを冷静に、一番痛んでみている方が誰かと考えました。ですからマリア様がどれ程痛みを感じて、この世の中に悔い改めを求めているか。「悔い改めなさい、悔い改めなさい」毎メッセージにいつも悔い改めを叫んでいる御心が分かりました。そして、ピオ神父様のその痛み、聖痕の意味も分かるようになりました。どのように時代が変わっても、いつも小さくされてしまう人々は数え切れないほど多くいます。その人々のために教会は何をしているのか、その教会のメンバーである私達はなにをしているのか、よく考えて見ますと、やっぱり私達がどのような生き方をすべきかについて、メッセージがあったので

はないかと思えます。

皆様、ローマを初め色々な聖地で望ましくない姿がみえることを、否定することではこの問題は解決出来ないと思えます。何故そのような人々が、本当に貧しい人々が、何を求めてこの教会の心臓に集まっているかを、教会の頭達を初め、全ての信者が深く考えなければならないと思えます。

一緒に巡礼に行った他の皆さんの感じられた話は、後で分かち合う機会があると思えますが、私はそういう印象が強かったのです。

もう一回順を追って整理しますと、マリア様であるお母さんが、私達を愛しています。考えられないくらいに、想像出来ないくらいに私達を愛しています。そしてその愛は必ずイエス様につながっています。私達が誰よりもイエス様に集まるのを望んでいます。そのイエス様はご自分の痛み、ご自分が見せた痛みの意味を私達に分かってほしいと願っています。その望み通りに教会が生きていないことも事実なことと私は思えます。私達、個人の信仰だけではなく、もっとこの世の中で痛みを感じている人々のために、絶え間ない祈りが必要ではないかと思えます。私の痛みは、私ではない人の痛みを祈る時に、私の痛みも癒されることを信じましょう。

ありがとうございました。